

2026

世界を生きる人の話を、直接聞こう。

難民リレー 講義報告書

国を離れざるを得なかった人たちの、リアルな物語の
ニュースやSNSでは決して見えないその人の人生を、直接聞いてみませんか？

第1回

ウクライナ
避難民
6月14日(日)

第2回

ウガンダ
難民
7月12日(日)

第3回

シリア
難民
8月29日(土)



「はじめに」

本年度の「難民リレー講義」では、難民として故郷を離れざるを得なかった方々から、その経験や故郷への思い、日本での暮らしについて直接お話しいただきました。

その言葉の一つひとつには、ニュースや SNS だけでは知ることのできない、一人ひとりの人生と切実な願いが込められていました。

高校生の皆さんには、講師の方々の経験を通じて感じたことを、自分自身の生き方や考え方につなげてほしいと思います。苦しい状況にある人の声に耳を傾け、その人の立場や思いを理解しようとすることは、人道の精神の第一歩です。今回の学びを大切にしながら、人を思いやり、行動できる人へと成長していかれることを心から願っています。

この講義で得た学びや気づきを、その場限りの経験で終わらせることなく、これからの学校生活や日々の行動の中で生かしていただきたいと思います。世界で起きている出来事に関心を持ち、自分とは異なる立場の人の思いを理解しようとする姿勢は、よりよい社会を築く第一歩です。皆さんが今回の学びを胸に、自ら考え行動する人へと成長されることを心から期待しています。

最後に、本事業の実施にあたり、多大なるご支援とご協力をいただいた松山さかのうえ日本語学校の皆様をはじめ、講師の皆様、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

皆様のお力添えにより、高校生たちが人道や平和について主体的に考える貴重な学びの機会を提供することができましたことに、深く感謝申し上げます。

事務局長 河瀬 利文



GUEST COMMENTS

講師の皆さんから寄せていただいたメッセージ

CONTENTS

01 ウクライナ P 03

02 ウガンダ P 07

03 シリア P 09

ウクライナ出身 / ロボフさん

01

今回の講義にウクライナ避難民として参加し、自分たちが経験した戦争や避難生活について直接伝える機会をいただき、とても意義深く感じました。ニュースだけでは伝わりにくい、故郷を離れなければならなかった不安や悲しみ、日本で生活する中で感じたことを高校生の皆さんに知ってもらえたことを嬉しく思います。真剣に話を聞き、質問してくれる姿がとても印象的でした。この交流を通して、難民問題や平和について身近なこととして考えてもらえれば嬉しいです。

ウガンダ出身 / Aさん

02

今回の愛媛への旅は、私にとって本当に素晴らしく、忘れられない経験になりました。
ゲストスピーカーとして高校生の皆さんに自分の経験やストーリーをお話する機会をいただき、本当にありがとうございました。今回の旅は、私にとって人生で2回目の飛行機に乗る機会でもあり、それだけでもとても特別な経験でした。
松山に到着してからは、皆さんにとっても温かく迎えていただき、心から感謝しています。
学生の皆さんやスタッフの皆さんの温かい反応に触れ、私自身もたくさんのことを学びました。今回の経験は、外国人、そして難民と日本社会とのつながりを深めていきたいという私の目標に向けた、大切な一歩になりました。関わってくださったすべての皆さん、本当にありがとうございました。皆さんからいただいた思い出と経験は、これからもずっと大切にしていきます。

シリア出身 / Zenさん

03

今回の機会を通して、私が一番強く感じたのは、「直接会うこと」の力です。
難民という言葉は、ニュースや学校の授業の中で聞くことができます。でも、その言葉だけでは、その人がどんな人生を歩いてきたのか、どんな夢を持っているのか、どんなことを好きなのかまでは分かりません。実際に会って、話して、一緒に笑う。その瞬間、大きなカテゴリーではなく、一人の人として相手を見ることができるようになるのだと思います。
「知りたい」という気持ちが、実際に人を動かす。そして実際に会うことで、その「知りたい」が次の「自分も何かしたい」に変わっていく。
私たち家族を温かく迎えてくださった松山の皆さんに、心から感謝しています。
このような貴重な機会をつくってくださった主催者の皆さま、参加してくださった高校生・子どもたち、そして温かく迎えてくださったすべての松山の皆さまに、心から感謝します。また松山で、皆さんに会える日を楽しみにしています。



ウクライナ 01

2026.06.14



「突然失われた日常」

2026年6月14日、「難民リレー講義」第1回・ウクライナ編を開催しました。

今回は、ウクライナから日本へ避難してきたアレクサンドル ロボフさんとそのご家族、また、ウクライナ避難民の受け入れ・支援に携わる小野一馬さんを講師にお迎えしました。

ウクライナの文化や暮らし、ロシアによる侵攻を背景とした避難の経験、日本での生活、そして避難してきた人々を支える取り組みについてお話を伺いました。講義を通して高校生たちが出会ったのは、「難民」という言葉だけでは表せない、一人ひとりの暮らしや家族、夢、そして未来でした。

なぜウクライナ侵攻は起こったのか

「ロシアと国民を守るにはこれしかなかった。」これは、プーチン大統領がウクライナ侵攻を実施した理由として述べた言葉です。プーチン大統領は、ウクライナの NATO（北大西洋条約機構）への接近を阻止し、ロシアという国と国民を守るためには、侵攻はやむを得ないものだったと主張しています。

「人の数だけある真実」

戦争を経験したウクライナ避難民の方は、「人間はある一方から見たものしか真実だと思わない。だが、真実はたくさんある。その見方の違いが戦争を引き起こした。」と語っていました。ウクライナにも、ロシアにも、そして世界中の国々にも、それぞれの立場や考え方があり、それぞれの「正義」や「真実」があります。その違いも、戦争が起こる背景の一つなのだと思います。ウクライナ侵攻に至った背景には、さまざまな要因があります。だからこそ私たちは、一つの情報だけを鵜呑みにせず、自分で調べ、考えることが大切なのだと感じました。

私たちにも降りかかるかもしれない一瞬調が壊れる戦争一

ロボフさんご一家のウクライナ・ヘルソン市での暮らしは、すべてが順調でした。父は大学教授として、母はレストランマネージャーとして働き、娘は高校生でした。そんな彼らの生活は、爆発音一つで壊れてしまいました。避難生活の中では、避難を諦めたいと感じることもあったそうです。しかし、生命の安全を第一に考えたことが、彼らの懸命な避難生活につながりました。日本へは、「戦争から遠く離れたい」という思いで来たそうです。

順調だったウクライナでの生活を戦争によって失ったロボフさん一家のお話を伺って、私は初めて、戦争を自分ごととして捉えることができました。今後は、日本での安全な暮らしを当たり前と思わず、感謝しながら、一日一日を大切に過ごしたいと思っています。

突然失われた日常―安全を求め、離れた日本へ―

ウクライナから大分県別府市に家族 3 人で避難した母親のオレーナ コロレンコさん。彼女が日本を選んだ理由は、戦地から遠いことによる安全性や、G7としての日本の受け入れ姿勢、そして武士道など、日本文化への関心だったそうです。

言葉の壁から生計を立てることは容易ではなく、避難後も厳しい生活を送る人があるそうです。一方で、別府市では難民に対する就労支援や医療支援など、さまざまな支援が行われています。娘は大学生として、日本語や新たな学びに向き合っています。

「別府市は第二の故郷になりつつある。」

彼女はそう力強く語っていました。

親戚が残る母国の戦争が終わり、いつか故郷へ帰れる日を願いながらも、文化の違いを乗り越え、笑顔を取り戻そうとする。家族一丸となって明るい未来を築こうとする姿が印象的でした。

母・オレーナ コロレンコさんの願い―不確かな未来を生きる私たちへ―

ロシアの侵攻を受けて避難したウクライナ人一家の母親、オレーナ コロレンコさんは、「一日でも早く戦争が終わってほしい」と語っていました。

ウクライナから避難した後も、彼女は故郷へ帰りたいと思い続けてきました。ロシアによる侵攻が始まる前はレストランのマネージャーとして働いていましたが、その平和だった生活は一変してしまいました。

彼女は当時を振り返り、「いつ日常が崩れるかは分からない。平和や安定は永遠ではないからこそ、先の見えない将来のために備えることが必要だ」と訴えていました。

そして最後に、私たち高校生に向けて、「自分の選んだ道を信じて進んでほしい」という力強いメッセージを送ってくれました。

日本を通じて知った「当たり前」という日常の重み

父親のオレクサンドル ロボフさんが日本での暮らしで感じていることを教えていただきました。

まず、「安全は何事にも代え難い」ということです。ロボフさんご一家の親戚はウクライナに残っており、親戚のことを考えると早く母国に帰りたいそうです。しかし、安全を考えると、日本に留まらざるを得ないといいます。次に、「日本で外国人として生きていくことは困難である」ということです。今でこそ教職に就くことができたそうですが、日本語が話せなかったため、日本で仕事を見つけることにはかなり苦労したそうです。

最後は、「戦争が終わって故郷のヘルソンに帰った後、故郷でどのような人たちと付き合いやすいのか分からない」ということです。ヘルソンの人々は、ロシア軍による全面侵攻が始まる前から変わってしまったといい、国外に避難せず残っている人々は、毎日のように戦争による死者を目にしているそうです。

戦争は、自分たちの当たり前だった生活を変えてしまうだけでなく、未来さえも不安にさせてしまいます。「決して戦争はしてはいけない」という言葉だけでは片付けられないものなのだと痛感しました。

避難民の暮らし

難民リレー講義に参加して、避難民の現状を直接学びました。

ウクライナだけでも、国外へ約 590 万人が避難しています。そのうち日本にも多くの避難民が暮らししており、避難した後もさまざまな課題を抱えています。日常生活の中で戦争のフラッシュバックに苦しむ人や、生活費の支援が一定期間で終了するため、言葉の分からない土地で仕事を見つけなければならない人もいます。

親戚や故郷から離れて生活する中で、「一刻でも早くウクライナに帰りたい」という言葉を何度も聞きました。

「平和は高級ではない。安定は永遠ではない。」

この言葉を胸に、私も今の生活を当たり前だと思わず、大切にしていきたいと思います。

覚悟が紡いだウクライナ難民支援

①小野一馬氏のウクライナ難民支援活動

今回お話を聞かせていただいた小野一馬氏は、ロシアによるウクライナへの大規模侵攻以降、大分県別府市にてウクライナ難民を受け入れてきました。また、ウクライナへの支援物資の提供など、多方面から支援を行っています。

②注力した支援と「医療翻訳」

ウクライナ難民の受け入れにおいて、小野氏が力を入れたのは、「就学・就労支援」と「医療支援」です。なかでも、

ウクライナ避難民への医療支援として医療機関での翻訳業務を取り入れたのは、全国で初めての取り組みだったそうです。

小野氏は当初、医療分野での支援は想定していなかったそうです。しかし、いざ受け入れを始めると、異国の病院で自分の病状を正確に伝えることの難しさに直面しました。そこで、ロシア語の翻訳が可能な大分県の職員と連携し、医療機関に避難民の病状を正確に伝えられる仕組みを構築しました。

③ 難民支援の実態とやりがい

小野氏は、「難民支援はなかなか簡単なものではない。使命感や正義感だけで為せることではない」と語っていました。

お金や時間、そして人生の多くを難民支援にかけ、相当な覚悟が必要なのです。

この活動の実態を「半分後悔、半分充実」と表現しながらも、避難民の方々が笑顔を取り戻し、自立していく姿を見ると、やりがいを感じるそうです。

小野氏の先駆的な活動が正当に評価され、これからの日本社会における受け入れや支援の一つのモデルとなり、持続的な支援の輪が広がることを切に願っています。

講演から学ぶ、日本と自由

講演の中で特に印象に残ったのは、日本という国の自由度の高さについてのお話です。

講師の方は、日本での生活を通して「日本は自由な国だと感じている」と話されていました。また、日本の良いところとして桜や花見を挙げており、春になると多くの人が桜の下で楽しい時間を過ごしている様子がとても素敵だと感じているそうです。

日本で暮らしていて困ったことや不満は特にないそうですが、父親のアレクサンドル ロボフさんは「日本はルールが厳しい」と感じていることを笑いながら話されていました。同じ環境で生活していても、人によって感じ方が異なることが分かり、とても興味深かったです。

また、日本語については文法が難しく苦労しているものの、日本各地へ出かけたり、新しい経験をしたりすることが楽しいと話されていました。慣れない環境の中でも前向きに生活している姿が印象的でした。

私はこの講演を聞いて、日本で当たり前だと思っている生活や文化の魅力を改めて考えることができました。また、日本で暮らす外国の方々が安心して生活できるように、相手の立場を理解しようとするのが大切だと感じました。今回の講演は、平和な暮らしの大切さと異文化理解について学ぶ貴重な機会となりました。

ヴィクトリア コロレンコさんから学んだウクライナ人の前向きさ

娘のヴィクトリア コロレンコさんは、現在は日本の大学に通っています。

彼女に将来について尋ねたところ、「せっかく日本語を一生懸命勉強しているし、もう 4 年間も住んでいるので、この経験が無駄にしたいくない。将来も日本に住み続けたい」と話してくれました。

そして講演会では、「毎日日本で一生懸命頑張っています。なので大丈夫です」と語っていました。その前向きな姿勢がとても印象的でした。

その前向きさの理由の一つとして、小野さんは、ウクライナの人々には「粘り強さや不屈の精神がある」と話してくださいました。私も調べてみたところ、ウクライナは歴史の中で国家や支配者の変遷を何度も経験し、また「自由の人」を意味するコサックの発祥の地でもあるそうです。

そのようなウクライナの歴史や文化が、こうした前向きな姿勢の背景の一つになっているのかもしれません。

過酷な環境の中でも、「経験を活かしたい」「大丈夫だ」と前向きに語る彼女の姿勢からは、私たちも学ぶところが多いのではないのでしょうか。

言葉が通じるだけで世界が救えるのか？一言の壁だけではない無関心の壁

ウクライナ避難民の方の講義を受け、言葉の壁というものを強く感じました。

言葉が分からないと、相手が何を求めているのか、何をすればいいのかが、当たり前ですが全く分かりません。だからこそ言葉は、相手に寄り添うための第一歩なのだと感じました。

また、たとえ言葉が通じて、周囲が無関心では、できることは限られてしまいます。

私たち高校生ができることは、言語を理解してコミュニケーションを取れるようにすることももちろんですが、相手の抱えている課題に「自分ごと」として関心を持つことです。

生まれた場所が違っただけで、みんな同じ人間です。私たちは、この「無関心」という壁を、少しずつでも壊していかなければならないと思います。

平和へのバトン―難民たちの想い―

娘のヴィクトリア コロレンコさんは、来日前は、「日本の高校は勉強ばかりで厳しい」という印象を持っていたそうですが、実際には学校行事や友人との交流もあり、充実した学校生活を送ることができたそうです。

一方で、言葉の壁には苦勞し、故郷や友人が恋しくなることもあったそうです。それでも、「新しい人との出会い」が支えになったと話してくれました。

「難民も皆さんと同じ普通の人。温かい声かけや理解が大きな支えになります」

ヴィクトリア コロレンコさんのこの言葉が心に残りました。

今回の講義を通して、一人ひとりに寄り添い、平和について学び続けることの大切さを学ぶことができました。

参加した高校生の思い

私たち日本国民は、なんて快適で、幸せな毎日を送っていることだろう。今回の講義を聞いて、そう思いました。ロシアによる「ウクライナ侵攻」が始まったというニュースが、もう4年前のことだということに驚きを隠せません。そんな4年もの間、苦しんできた一家のお話を聞き、さまざまな思いが込み上げてきました。

一家の父、オレクサンドル ロボフさんは、ウクライナでは大学教授をしていました。しかし、戦争によって日本にきたことで、お金を稼ぐことが難しくなり、「戦争に人生を狂わされた」とおっしゃっていました。

それを聞き、自分は本当に幸せなのだと、そして、この生活は決して当たり前ではないのだと気づかされました。今日のような機会を通して、今の生活がどれほど幸せなものなのかに気づくことができました。平和を大切にする、こと、安定を当たり前だと思わないことを胸に、これからも一日一日を大切に生活していきたいと思います。

MEDIA

活動が、新聞でも紹介されました

難民リレー講義の取り組みや講義の様子は、地域紙にも掲載されました。ここでは、その一部をご紹介します。

ウクライナ

本誌 P03～06

22年から大分で避難生活 ウクライナ人一家「終戦を」



避難先の生活について話すオレクサンドル・ロボフさん(右から3人目)ら＝14日午前、松山市岩崎町2丁目

日本で避難生活を送る難民の現状を学ぶ講座が14日、松山市岩崎町2丁目の日本赤十字社東支店であった。ロシアの侵襲を受けて避難したウクライナ人一家が、戦火の続く母国への思いや言葉の通じない国で暮らす苦勞を語り、県内の高校生約70人が耳を傾けた。2022年5月に大分県別府市へ逃げてきたオレクサンドル・ロボフさん(45)と妻のオレーナ・コロレンコ

さん(38)は、娘のヴィクトリア・コロレンコさん(19)が登壇した。大学教授だったロボフさんは故国を離れた選択を快く受けていたが、何となく馴染み所へ行くのはとても難しい決断だった。多くの爆発を聞き、私は命を選んで、だと言明。日本語を話さず、仕事が見つからず苦勞したと明かし、日本での生活は安全で何ものにも代えがたいとこつこつ今でも帰

りたい。「一日でも早く戦争が終わってほしい」と話した。妻のコロレンコさんは日本でも台風に伴う閉店に開戦時の光景が浮かび、花火が爆音と重なり、楽しめないなど心の鬱を吐露。「平和は恒久的ではなく、一瞬で激変する」と訴えた。言葉の壁を感じたという松山北高3年の河野礼さん(17)は「小さな事だが外国語の習得が私にできることだ」と話した。出入国在留管理庁によると、5月31日現在、日本国内にはウクライナ避難民が1943人(愛媛2人)が留まっている。

講座は日赤東支店が県内の高校生を対象に催し、NPO法人松山さかのう未来日本語学校が協力を。7月にはウガンダ、8月にはシリアの難民を招き開講予定。(井上華菜子)

ウガンダ

本誌 P07～08

苦難・決意 難民の肉声 松山・高校生講座 ウガンダ人男性語る



高校生の前で、ウガンダでの活動について語る男性(中央)

愛媛大附属高3年の桜井結菜さん(17)はウガンダの若者の政治的関心の高さに驚いた。まもなく選挙権を得るので、日本の政治に積極的に参画したい」と語った。講座は日赤東支店が開催。NPO法人松山さかのう未来日本語学校が協力した。(長谷川悠介)

日本に避難している難民の現状を学ぶ講座が12日、松山市岩崎町2丁目の日本赤十字社東支店であった。千葉県に住むウガンダ人男性が、若者が影響力を持つ性30)が、母国の現政ターに打倒されるのを権への反対運動を続ける中で身の危険を感じ、視している。と述べた。祖国の若者を導く決意を語った。高校生約50

人が耳を傾けた。約40年にわたってムセベニ大統領が長期政権を維持するウガンダ。男性は人口率の高い県に住む。若者が影響力を持つ性30)が、母国の現政ターに打倒されるのを権への反対運動を続ける中で身の危険を感じ、視している。と述べた。祖国の若者を導く決意を語った。高校生約50



ウガンダ

2026.07.12

02



「自由を求めて、日本へ」

2026年7月12日、「難民リレー講義」第2回・ウガンダ編を開催しました。

今回は、ウガンダで政治活動を行っていたAさんを講師にお迎えしました。

ウガンダの文化や暮らし、豊かな自然、政治や社会の現状、そして政治活動を行う中で避難を決意した経験、日本での生活や仕事についてお話を伺いました。講義を通して高校生たちが会ったのは、「難民」という言葉だけでは表せない、一人の人の生き方や、自由への思い、そして新たな場所で未来を築いていく姿でした。

私が知らなかった国、ウガンダ

Aさんは出身国であるウガンダについて多くの興味深い話をしていただきました。

ウガンダは美しい自然に恵まれた国で、アフリカ最大の湖であるヴィクトリア湖や火山があり、マウンテンゴリラやキリンなど、多くの野生動物が生息しています。こうした豊かな自然から、ウガンダは「アフリカの真珠」と呼ばれているそうです。また、公用語が英語であることにも驚きました。これは、かつての欧米による植民地支配が大きく影響しているそうです。さらに、日本では硬貨と紙幣を合わせて6種類ほどのお金が使われていますが、ウガンダでは11種類もあるそうです。日本とは異なる額面の紙幣を実際に見ることもできました。

異文化を知ることは、自分の世界を広げてくれます。今回、ウガンダについてたくさんを知ることができ、新鮮な経験になりました。

ウガンダの過去から現在への政治の移り変わりと若者の力

ウガンダでは、過去にアミン政権による独裁政治が行われ、地域による支援の差や差別が生じるなど、不安定な社会状況が続いていました。その後も、現在まで続くムセベニ政権のもとで、民主化の停滞や権力の集中といった課題が残されています。また、講演者を含む反対勢力の活動家が拘束されるなど、政治的な問題も起きているそうです。

しかし、近年では若者の政治への関心や影響力が高まっているそうです。

講演者は日本に来てからウガンダへ帰国していないため、現在の詳しい状況は分からないものの、ニュースや家族との電話から得た情報によると、以前よりも社会は良くなっていると話していました。

若者が政治に関わろうとする動きもあり、まだ多くの課題が残されている一方で、社会は少しずつ前向きに変化していることが分かりました。

独裁政権と若者の政治意欲の衝突

Aさんはウガンダで政治家として活動していました。ウガンダでは若者も積極的に政治に参加し、大きな影響力を持っているそうです。しかし、ウガンダの現政権は独裁的な政治を行っており、政府はこうした若者たちの存在を警戒していました。

Aさんもその一人で、政治活動を行う中で、自分の命が狙われていると感じるようになり、日本へ来ることを決めたそうです。数ある国の中から日本を選んだ理由には、ビザの関係もあったそうですが、日本は安全でセキュリティがしっかりしていること、そして日本の大学で学びたいという思いもあったそうです。

自由が制限された母国での生活―避難を決心した理由―

Aさんはウガンダにいた当時、長期政権が続く中で、独裁政治に反対する活動家の一員として活動していました。政府に反対する活動を行えば逮捕されることもありましたが、Aさんたちは、逮捕や投獄を経験しても活動を続け、民主化や若者の雇用政策を訴えていたそうです。

また、選挙においても自由に意思を表明できない状況があり、反対票を投じたことで危険な目に遭った人もいたといいます。こうした状況の中で、Aさんは自分の身の安全を守るため、日本への避難を決心しました。

安心して暮らせる日本

Aさんは、日本での生活について、時間を守る文化や街の清潔さに驚いたと話されていました。日本では当たり前とされていることが、ウガンダとの大きな違いとして印象に残ったそうです。

一方で、最も苦労したのは日本語が話せないことで、希望する仕事に就けないなど、多くの困難があったことも語られていました。しかし、日本語が十分に分からなくても、周りの人が優しく接してくれたことで、安心して生活することができたそうです。

また、日本の文化に触れることも、日本で暮らす魅力の一つだと話されていました。

家族や友人が暮らすウガンダへの思いは今も変わらない一方で、安全性や教育環境の充実などを理由に日本を避難先として選んだお話を聞き、日本が安心して暮らせる国であることを改めて感じました。

ウガンダ・世界とつながる、日本での新たな仕事

日本では、アメリカへの留学を支援する会社の日本支社で働いているそうです。主な仕事内容は、アメリカの高校生を対象とした夏季留学の募集や、来日した高校生への支援、高校生の日本語学習をサポートする先生の支援などです。

その一方で、日本赤十字社の支部でもボランティア活動を行っています。

ウガンダにいた頃には看護師として働いたり、赤十字社でボランティアをしたりしていたそうです。これまでの経験を日本でも生かしながら、新しい仕事や活動に取り組んでいることがすごいと思いました。

高校生ができること

高校生がウガンダの方たちやウガンダのためにできることは、たくさんあると思います。

まず1つ目は、知ることです。ウガンダで何が起きているのか、どのような国なのかを知り、知識を深めることが大切だと思います。

2つ目は、今回の難民リレーのようなイベントに参加してみることです。ウガンダの方から直接お話を聞くことで、ニュースやインターネットだけでは分からないことを知ることができると思います。

3つ目は、物資や資金面でのサポートです。例えば、服のリサイクルや募金など、少しでもいいので、自分にできることから参加してみることが大切だと思います。

ウガンダの難民リレー講義を聞いて

私は今回の講座を受けるまでは、ウガンダという国について、名前を聞いたことがある程度の知識しかありませんでした。今回の講座を通して、ウガンダには豊かな自然があることや、政治的な問題を抱えていることを知りました。また、Aさんが危険な状況に置かれながらも、国をより良くするために行動していたことを知り、その行動力をとても尊敬しました。

今回の講座をきっかけに、世界には自分がまだ知らないことがたくさんあると感じました。これからも、こうした活動やボランティアに参加していきたいと思います。



シリア

2026.08.29

03



「故郷を離れ、日本で暮らす」

2026年8月29日、「難民リレー講義」第3回・シリア編を開催しました。

今回は、シリアから日本へ避難してきた Zen さんとそのご家族を講師にお迎えしました。

シリアの歴史や文化、食や暮らし、長く続いた内戦と避難の経験、そして日本での生活や仕事についてお話を伺いました。

講義を通して高校生たちが出会ったのは、「難民」という言葉だけでは表せない、故郷を離れ、新たな場所で暮らしながら未来を築いていく一人ひとりの姿でした。

シリアの文明と伝統的な食文化

シリアは中東・西アジアの地中海東岸に位置する国で、首都はダマスカスです。ダマスカスは、世界で最も古くから人が住み続けている都市の一つとして知られています。

シリアではアラビア語が使われており、学校では英語やフランス語も学ぶそうです。フランス語を学ぶ背景には、かつてシリアがフランスの委任統治下に置かれていた歴史があります。

続いて、食文化についてです。シリアではピスタチオが有名で、お肉を使った料理も多くあります。例えば、羊肉や鶏肉などを金属製の串に刺し、回転させながら焼く「シャワルマ」や、ヤギのミルクとピスタチオを使ったアイスクリームなど、さまざまな料理があります。

古代の文明やシリアの食文化に触れることで、戦争や難民という言葉だけでは分からない、シリアの豊かな文化を知ることができました。

歴史と文化から知るシリア

シリアには、テル・カラメル遺跡やアレppo城、ダマスカス旧市街など、長い歴史を感じさせる場所があります。また、古代から文字や学問が発展し、教育や建築などの分野でも豊かな歴史を持っています。

シリアにはイスラム教徒だけでなく、キリスト教徒など、さまざまな宗教を信仰する人々が暮らしています。

また、石けんや木箱、楽器などの特産品もあり、ピスタチオを使った食文化も特徴の一つです。

このように、シリアには長い歴史や豊かな文化があり、現在の姿だけでは分からない多くの魅力があることを知りました。

近年変わってきたシリアの政治体制

政治面では、長年アサド政権による統治が続いていました。アサド政権下では、政府に反対する人々への弾圧などが行われ、政治的な自由が制限されていたそうです。

2011年には、チュニジアなどから広がった「アラブの春」と呼ばれる民主化運動の影響がシリアにも及び、政府に対する抗議運動が起こりました。しかし、政府による弾圧やさまざまな勢力・外国の介入などによって状況は複雑化し、長期にわたる内戦へと発展しました。

この内戦によって、多くの人々が命を失い、さらに多くの人々が故郷を離れて避難することになりました。

そして 2024 年 12 月、長年続いたアサド政権が崩壊しました。

シリアの歴史や政治について学ぶことで、現在の社会がどのような経緯でつくられてきたのかを知ることができました。

当たり前の生活を離れて～シリアからの避難～

Zen さん一家は 2011 年に始まった内戦により、それまで暮らしていた母国で安心して生活が続けることが難しくなり、安全を求めて避難を決意。2013 年にレバノンへ移住したことを始め、トルコやエジプトなど、さまざまな国を渡ってきたそうです。

避難は、住み慣れた場所や、それまで築いてきた生活を離れる大きな決断でした。新たな環境で生活を築きながらも、故郷を離れざるを得なかった経験について語ってくださいました。

世界中で子どもが安心して暮らせるように

シリアでは内戦によって多くの人が命を失い、約 600 万人が国外へ避難したとされています。

父親の Zen さんは、日本に来ることができたのはとても幸運だったと話していました。その理由は、日本人が優しく接してくれたことや、さまざまな手続きを助けてもらえたことだそうです。

Zen さんには現在 14 歳と 12 歳になる息子がおり、「子どもたちには日本で教育を受けてほしい」と話されていました。シリアは状況が改善している一方で、まだ安全とは言い切れないこと、そして日本の方が安心して暮らすことができると考えていることが理由だそうです。

しかし、日本がこれからもずっと平和であるとは限りません。これからの日本をつくっていく私たち高校生が、選挙などを通して社会について考え、安全で平和な日本をつくっていくことが大切だと思いました。そして、日本が平和であり続けることが、世界の平和にもつながっていくのではないかと思います。

言葉の壁と日本人の優しさ

Zen さんは、日本に来て、安全な国で暮らせることへの嬉しさや安心感を感じたと話されていました。

日本に来た当初は、日本語が話せず困ることもあったそうですが、日本人が家族のように優しく接してくれたことで、安心して生活することができたそうです。また、日本語だけでなく、日本の生活やさまざまな制度も難しかったものの、友人に助けをもらいながら乗り越えてきたと語られていました。

この話を聞き、言葉の壁が日本で暮らす上で大きな困難になる一方で、周りの人の優しさや支えが、安心して暮らすことにつながるのだと感じました。

日本での就労の苦勞から同じ境遇の人々への支援へ

Zen さんは来日後、大学院で建築を学び、修士課程を修了した後、秋葉原の設計会社で働いています。しかし、そこに至るまでには多くの苦勞がありました。

来日前には JICA によるプログラムを受講していましたが、日本語教育は含まれていなかったそうです。そのため、大学院で勉強する一方で、日本語も学ばなければならませんでした。

就職活動では、シリア出身であることや年齢、日本での就労経験がないことなどが影響し、80 社以上から不採用となったそうです。それでも諦めずに就職活動を続けたことで、現在の会社に出会うことができました。

また、NPO 法人 WELgee とも出会い、現在は難民の方々の支援にも関わっています。自分自身も難民として多くの苦勞を経験したからこそ、今度は自分が支援する側に回りたいという思いがあるそうです。

自分自身の経験を、今度は誰かを支えるために生かしている姿が印象に残りました。

難民と現実の壁、希望と努力で変えていく未来

日本を避難先として選んだ理由は、安心・安全で、人が優しいことだったそうです。日本で暮らす中では、言葉の壁やさまざまな制度の難しさに直面しました。銀行口座の開設などにも友人の助けが必要だったそうです。

それでも、周囲の人々の支えを受けながら生活を築き、現在は自らも難民支援に携わっています。

「言葉に通じない人がいるときに、どう行動するか」。講義を通して、このことについて考える機会になりました。人を助けようとする姿勢や、信念を持って努力すること、そして希望を持ち続けることの大切さを教えていただきました。

私たちも、一人ひとりが相手を思いやり、自分にできることを考えて行動することで、より良い社会をつくっていけるのだと思います。

私たちにできること

今回、シリアから避難してきた方のお話を聞いて、講師の方が話されていた「諦めないこと」や「ちょっとしたことでサポートしてほしい」という言葉が心に残りました。

「諦めないこと」は、特に高校生がこれから進路を決めていく上でも大切なことだと思います。

そして、私たち高校生にできることは、まず難民の方々や世界で起きていることに興味を持つことだと思います。シリアの情勢について知り、遠い国の出来事としてではなく、自分たちにも関係することとして考え、「自分には何ができるのか」を考えていくことが大切だと思います。

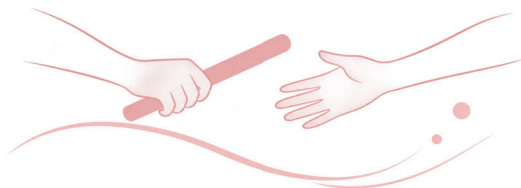
知ることから、できることへ。

この冊子を通して、難民を取り巻く現状や、

日本で暮らす人々の声を知っていただけたのではないのでしょうか。

一人ひとりが「自分にできること」を考え、行動する。

その小さな一歩が、誰もが安心して暮らせる、よりよい未来につながっていくことを願っています。



今回ご協力いただいたみなさま



NPO 法人 WELgee は、紛争や迫害から日本に逃れてきた難民の方々が、経験や専門性を活かして日本で人生を再建できるよう、「育成」「就労伴走」「共創」の3つの事業を展開しています。



2022年以降、ウクライナ避難民50名規模の受け入れ支援を主導。住宅確保、行政手続き、日本語教育、就労支援、医療支援、学校支援を包括的に実施し、自治体・教育機関・NPO・地域社会を結ぶ支援ネットワークを構築しています。



主催

